

電車の中の居眠りについて ——日本人のしつけ意識の考察——

三井加寿恵

1. はじめに

この夏「船こぐ淑女」と題する一文が朝日新聞（'90年8月31日付）の“窓”というコラムに載り、その内容が強く筆者の興味をひいた。以下ペンネーム“風”氏の文章を要約する。緊張高まる中東情勢をよそに今のところ平和な日本、朝夕の電車は漫画本に読みふける若者や猛烈社員風の背広姿と相変わrazuの光景である。

しかしよく見ると電車の中で眠っている人が実に多く、なかでも若い女性の船こぐ姿が意外にたくさん目につく。おしゃれな服装が少し乱れて首が傾き、隣の人の肩口にかかったりするが、当人はいっこう気にならぬ風情だ。この風景は西洋人の目にはいささか奇異に映るのではあるまいか。パリやロンドンの電車で居眠りしている人を見掛けることはごくまれであり、まして若い女性が頭を垂れて、右に左に揺れ動くさまは、まずお目にかかれなithinkと思てよい。

外国人とて眠くならないわけではないのだが、公衆の面前ではじっと我慢しているのである。では、なぜ日本人は眠るのか、とつらつら考えた“風”氏は次のように解釈をする。

第一は、日本社会の安全度。若い女性が見ず知らずの大衆に囲まれながら懐中物を気にせず眠りこめる国は、世界中そうざらにない。

もう一つは、日本人の他者との関係の仕方にかかわりがありそうだ。われわれにとって、他者とは結局仲間うちの目。おしゃれや気どりも仲間うちの評価だけが問題で、不特定多数の人々が相手となると、恥をかき捨ててもあまり気にならないのである。

それに比べると、フランス人などは大衆のなかに潜む他者の目を意識して、常に武装する。だから彼らの日常は緊張が高い。船こぐ淑女は、どうやら安

らか日本の象徴にちがいない、と風氏の説は結ばれている。

たしかに朝夕の通勤電車や列車の中で居眠りをする人が目につく。とくに対面式の電車の座席ではその姿が衆人の目にさらされるわけで、若い女性が脚を開き、左右の人の肩や胸元へその長い髪とともにぐっと傾いていたりすると見えていてもハラハラさせられる。頭の行方と被害にあっている隣人の反応に興味深くウォッチングするのは筆者ばかりではない。あたりの人々の目は何げなしに居眠り女性の派手な動きにそそがれているのである。

風氏の記事が載ってから何日か後に、やはり朝日の“ひととき”欄に載った「先進国らしくなって」と題する投書が目にとまった。6年振りにオーストラリアから帰国した八王子市の大沢陽子さん（50歳）の投書で、日本には身につけるもの、食物など高級品があふれ、お金次第の日本が身にしみたとある。その反面、ぶつかっても突き飛ばしても平気でやりすごす人が多く、夜遅く塾帰りとおぼしい小・中学生のマナーを無視した行動に憐れみを感じたと書かれている。

そして一番心を痛めたことは電車の中で居眠りをする人が多いことだったという。オーストラリアでは勤め帰りの人々が読書をしたり隣人と話したりして精気が溢れていたのに。彼女はこうして高級品を身につけて電車の中で居眠る人の姿に同情し、日本の経済力の向上がこうした人々の礎の上にあると思うと疲れ果てて眠る人をまともに見られないともいう。

東京のように繁雑な都会で時間に追われて仕事をし、時には何時間もかけて職場と家の間を往復しなければならないビジネスマンやウーマンたちが極度に疲れているのはよくわかる。席が空けば座りたい、ねむりたいのは無理もない。しかし居眠りをするのはビジネスマンたちだけではなく、男女大学生などにも多いのである。

かくいう筆者も電車の中で仮眠をとることが多く、“風”氏の指摘にはドキリとさせられた。

ただし言い訳がましくあえて言わせて頂くと、これから居眠ると決めた場合、筆者はひざの上に文庫本など開き読書の態を装い、隣人に寄りかからぬよう意識をし、多少かしいだときは「失礼しました」と一言お詫びをする、など気をつけつつ暫しの仮眠に疲れを休めるのである。やはり人前で居眠りすることには後ろめたさがあり、恥かしいという意識がある。悪いマナーと知りつつ、周囲に知り人はいない、と仮定して居眠っていたという気がす

る。

前述“風”氏の指摘にある「不特定多数の人々が相手となると、恥をかき捨ててもあまり気にはならない」意識と、筆者自身の「知り人がいないから居眠りをしてもよかろう」意識は（恥かしいことだが）まさに同一のものである。

日頃なぜ日本にはパブリック・マナーが育たないのだろうかという疑問を抱いていた筆者は、本稿で日本人のマナーの基本となる“しつけ”はどのような意識でなされていたのか、そしてそれはどのような意識でなされていたのか、を考察し、日本人の行動を規定する意識構造をさぐりたいと思う。

2. 現代日本人のマナーについて

’90年9月11日付朝日新聞の“ひととき”欄に川崎市在住の北沢奈美さんという方が「神津島民宿のなげき」という文を投書されている。それによると、新島と並んで夏に若者が集まる神津島の民宿の方々が、客である少年少女らのマナーの悪さを異口同音に嘆き合うそうである。

彼らは夜中じゅう我が者顔で騒ぎまくり、夜中になっても帰って来ない者もいる。注意すると「金を払っているのだから、何をしようと勝手だろう」という。ほとんどのグループが布団を上げない。部屋が散らかっているのも、他の客が通る廊下で平気で食事をし、立てひざをして食べている少女もいる。

島という独特の開放感が若者達のモラルをマヒさせてしまうのだろうか、と投書者は書かれている。

家を離れて若者だけの生活になると、旅の恥はかき捨て、の意識すらなく、日常の行儀の悪さを丸出しにしてしまうのであろうか。こうした少年少女たちの家におけるしつけはどのようなものであろうと考えてしまう。

これはかなり極端な例だ、と思いたいが、一般的にみても現代の若者、とくに女性達のマナーの悪さが目につくようだ。乱暴で汚ない言葉を平気で使い、電車の中などで大声で話し合う少女達。ラッシュアワーの通勤電車できちんと列を作って待つサラリーマン達の横からチャッカリ乗り込んで座ってしまう女子高校生。バスの列に割り込みをする短大生、etc。

また若者に限らず、駅のトイレなど公共施設の使い方のひどさも気になる。電車の中で大きく脚を広げて2人分の座を占領している男性。前にお年寄りがいても座を譲ろうとしない若者。かと思うとドカドカ乗り込んできて身内や友達を僅かの空席に押し込み他の乗客のひんしゅくをかう大人達。また、それこそ囲り全体が“見知らぬ人”である外国への旅行で日本人団体客

のマナーの悪さをあちこちで喧伝してしまうという事実もある。

戦後 45 年を経て、経済・科学の分野での発展は著しく、金満国、ハイテク王国日本の名をほしいままにしている。しかし精神面では、日本はまだまだ発展途上国なのではあるまいか。

第二次世界大戦の終局、つまり敗戦を境として、それまでの価値観や生活様式が大きく様変わりした。封建的なワクの中にきびしく閉じ込められていたもろもろが、アメリカの導入した民主主義によってセキを切ったように崩れ、混沌の中に様々な変化を見せて 45 年が経過してきた。それらの変化は良くも悪くも 180 度の転回をして日本人の意識や生活習慣を変えた。“戦争を知らない” 幸せな子供たちから “新人類” へ、それまでの日本人と行動も考え方も違う若者たちが話題となり、今やそうした世代が社会の中堅として日本社会を支える存在となっている。

3. 今は昔の日本人のしつけ

さて、そうした変容を顕著にみせたものの一つに、本稿で考察しようとする “しつけ” の問題がある。日本民族はかつて “礼節を重んじる民族” とされ、外国人の目から見ても、“礼儀正しい日本人” という認識をもたれていた。

筆者が子供の頃の家庭でのしつけを振り返ってみても、それはかなり厳しいものであった。

子供は親に口答えをすることは許されず、しつけの担い手であった祖母や母に叱られると、きちんと正座をして「私が悪うございました。これから気をつけますので勘弁してください」と、許しがでるまであやまるのが常であった。

食事ときの箸の上げ下げ、畳に座っての食事であったからその座り方、姿勢を注意される。ときには祖母に長い二尺物差を首から背中に入れられることもあり、前かがみで食べると「首が前にぞ落ちにけり」と冗談まじりの叱責がとんだ。

来客があれば子供ながらに座布とんをすすめ、お茶を入れて運ぶのは当たり前であり、畳に手をついてお辞儀をするのがごく普通の行儀作法であった。夏ならばうちわを客にすすめるくらいの才覚があったし、親に言われて茶菓子や果物を用意して客にすすめたりもした。

「はい」という返事と、他家を訪れるときの「ご免ください」という出入りの挨拶はとくに厳しくしつけられた。親類の叔父や叔母、他家の人に関す

る事柄は丁寧な敬語を使って話した。

学校や友人宅からの帰宅時間については非常にうるさくいわれたが、一つには他家を訪問して食事どきになり相手のお宅に迷惑をかけてはいけないという配慮からでもあったと思う。

小学校で習ったはずの“修身”（現在の道徳）の内容はほとんど記憶に残っていないが、家で日常にしつけられたことは明確に体で覚えいつか身についたものと思う。

また当時は子供も家の手伝いをよくさせられた。朝出勤前あるいは登校前に子供も含めて家族の全員がそれぞれにすべき仕事を割り当てられていた。佛壇や神棚のお茶やお水を新しいものに替える。仏様におぶきさまと称した御飯を上げる。部屋や玄関、家の前の道路の掃除などを済ませ一家で朝の食卓を囲み、それから勤めや学校に出かけるというのが日常の生活のパターンであった。

“しつけ”というと、明治の文豪幸田露伴の娘幸田^{あや}文氏の「父・こんなこと」がまず思い出される。八歳の時生母を亡くした文さんは継母に育てられるが、育ての母は「学事に優り家事に劣っていた」らしく、掃除や行儀作法のしつけはいうにおよばず、おしろいのつけ方も豆腐の切り方も障子の張りかた、借金の挨拶に恋の出入り、すべて父露伴が世話をやいてくれた、とある。

その中で^{ほうき}箒の使い方を教えられた文が、箒と平行に座って「ありがとうございました」と礼儀をとる。「よーし」と返事が来たところで起って歩きかけると「あとみよそわか」と声がかかる。もういいと思っても、もう一度よく呪文を唱えて見るんだ、というわけである。

露伴のしつけ方は尋常でなく細部にわたったものであり、露伴一流の美意識に根ざした厳しいものだったようだが、そこには男手で育てたと同様の娘に対するふびんさと深い愛情が感じられる。女として一人前に育てる、他所へ出して（嫁にやって）恥しくないように育てたい、という親の切ない心が感じられる。文氏も「父の教え方は実に惜しみない親切なものであった」と懐かしんでいる。

以上時代は明治にさかのぼり、露伴という並外れて博学な“父”のしつけという、多少特殊な例を引いたが、筆者の少女時代を振り返ってみても、現在50歳以上の人々にとって、こうした家庭のしつけはごく日常的なものではなかったかと思われる。

4. しつけの意味

最近ほとんど聞かれなくなった“しつけ”という言葉であるが、あの家の子供はしつけがよいとか、親のしつけがなっていない、という言い方は戦前の社会ではごく普通にきかれたものであり、日本社会の中での“しつけの伝統”は人々の生活の基本として古くから存在していた。

広辞苑によると「行儀作法を身につけさせること」とあるが、以前はもっと広い意味内容をこの語はもっていた。

日本民俗学評議員である大藤ゆき氏の『子どもの民俗学』によると、シツケというのは仕立てた着物の形を整えるために使うしつけ糸と同じで、しつけるとはもともと形を整える、矯め育てるという意味があった。さらに田畑の作物を植え育てる場合にもシツケルといったとある。

また根本謙之助氏は『しつけの贈り物』の中で、子供が育って成人になる過程で実施される基本的な生活習慣の訓練を、農作業や裁縫に使われる言葉を転用して「しつけ」と呼んだと書いておられる。同氏はまた、人間のしつけは「躰」と表記されるが、身だしなみを美しくするという意味で作られた文字であろうと述べている。

柳田国男氏も「躰などと書く新しい宛字が和製された頃からシツケは行儀作法の別名のようになった」と解釈されている。

しつけの一般的解釈を会津文化団体連絡協議会長である竹田正夫氏の表現をかりると、子供が生まれて、乳児期・幼年期・少年前期・少年後期というふう to 育っていく成長過程の中で、その家庭を中心に色々な生活規津、礼儀作法、言葉遣い、生活風習などを身につけさせるための教えがしつけであり、本来「家庭の中にあるもの」といわれている。

5. 会津地方におけるしつけの実際

次に、まだ前近代的な風習が色濃く残っていると思われる会津若松市でのしつけの調査から、村社会を中心とする地方のしつけがどのようなものであったかをさぐってみたい。

以下『会津の民俗 第15号 1985, 3』より、武家のしつけ、町方のしつけ、農村のしつけの実際を適宜引用する。

1) 武家のしつけ

会津文化団体連絡協議会長 竹田正夫氏が（同氏は大正の生まれである）その幼児、少年期に受けたしつけについて、講演の中で次のように述べてお

られる。

幼児期一番やかましく言われたのはことばと行儀に関する礼儀作法であった。会津では「旧会ことば」(旧会津藩士のことば)「町ことば」「在^{ざい}ことば」「御蔵入ことば」という違いがあり、男ことば・女ことばの区別、尊語・卑語・同輩言葉の違いがあった。旧会様同志は旧会ことばを使い、在ことばや御蔵入ことばを使ってはいけないと言われた。例えば近所の人に対し「おはようございます」と挨拶をしても、旧会同志では「おはようござりやす」という挨拶になり、丁寧なおまがり(お辞儀)をし合った。

子供に対しては「遊び^{じゆう}の仕」(十ヶ条)という教えがあり、「年長者のいうことをきかねばなりませぬ」「年長者にはおじぎをしなければなりませぬ」「うそをついてはなりませぬ」「卑怯^{ひきよう}なふるまいをしてはなりませぬ」「戸外で物を食べてはなりませぬ」「戸外で女子^{おなご}と言葉を交えてはなりませぬ」「ならぬことはならぬのです」などとあった。普通目上の人、母または祖母がしつけ役であったが、卑怯なふるまいをしてはならないとか、弱い者いじめをするなということは男親から言われた。

年長者の言うことを聞く、年長者におじぎをすることもやかましく言われ、家の中では立ったままおじぎをしてはいけなかった。物を差し上げることを“申し上げる”といったが、その態度が伴わないと“申し上げます”にならないので、片手で物を渡したり立ったまま物を渡したりということは絶対にできなかった。お座りをして物を出すということは武家の風習であった。

食事に関しては、座がきちっと決まっていた。家長の座、あととりの座、女たちの座とあり、家長だけが座布とんを敷いた。

おかわりを出す時は、箸をきちんと置いて茶わんを差し出し、受け取る。迷い箸、犬食いなどは厳しく叱られ、こぼしたものは箸と茶わんを置いて手で拾い、わきに置くというきまりであった。

着物を踏んではいけない、抜き捨ててもいけない、簡単な袖だたみをして枕元へ置くように教えられた。

2) 町方のしつけ

次に、やはり上記『会津の民俗 15号』に掲載されている会津民俗研究会会員の木村弥氏による商家等の採訪の記録から、町方のしつけの概要を見てみたい。

まず、最も多数にのぼる項目としてやはり食事時のしつけがあげられる。「いただきます」「いただきました」の挨拶をすること、食事は好き嫌いなく残さず食べよ、男子は食事のことは聞くものではない、箸は正しく持て、お

惣菜を箸で刺したり突いたりしてはいけない、朝夕の食事は家族そろって食べるように、などと教えられた。

人との関係では、親や目上の人、老人を尊敬すること、他人には親切に後輩はいつくしむこと、兄弟仲良く幼い友達にはやさしくせよ、とくに友人は一生の宝だから良い友達をもつように、相手の立場も考えよ、などと教えられた。

礼儀作法はていねいに、行儀よくすること、朝晩の挨拶、来客や外で知人と会う時も挨拶をし、おまがり（おじき）をするように、人に笑われたり指差されたりすることのないようにとしつけられた。

どこの家でも神仏を敬い、朝は必ず拝むこと、朝仏壇にお茶、神棚にお水をあげてから自分が飲むようにといわれていた。

ほとんどの家で、朝起きたら床をあげ自室の掃除をする。男子は玄関や通りの掃除、夕食前に風呂の掃除と炊きつけ、父親の仕事の手伝いが日課であった。女子は自室の掃除、台所の手伝いをしてから登校する。夕方も食事の手伝いやお使いなどが仕事であった。

その他無駄遣いをするな、物を大切にせよ等と教えられ、学校からまっすぐ帰ることや女子の帰宅時間にうるさい家が多かった。また火と水を尊び感謝するように教えられた。

3) 村方のしつけ

同じく『会津の民俗 15号』収録の、安藤紫香氏による南郷村農家のしつけを参照したい。

日本には「七つ前は神様」という言葉があって、ごく小さい時はあまり厳しいしつけはされず、分別のつく少年期からのしつけが厳しくなると一般に言われた。しかし生活の基本的な習慣についてはごく幼い頃からしつけられていた。

幼年期のしつけとして、箸の持ち方、ご飯と汁の位置など食事の仕方、着物を左前に着ないとか帯をたて結びにしないなど着付のしつけがされた。また火遊びがたしなめられ、いろりの火にあたる時に、炉に足を入れて薪の上に足を伸ばすことは禁じられていた。他人からお菓子などいただくと、かならず仏様にそなえてから食べるように教えられた。

小学校に入学すると、まず挨拶から始まり、4、5年の頃には子供としての仕事を分担させられた。昭和5、6年までは電燈の他にランプも使っていたので、どこの家でもランプのホヤ掃除は子供の仕事であった。学校から帰ると畑の草取りなどを言いつけられるので、子供達はまっすぐ家へ帰るのを嫌っ

たとある。田植時には馬耕の鼻どり、苗ぶち(苗打ち)、苗運び、昼食運びなどさせられ、冬の夜なべ仕事にわら打ち、縄よりをあてがわれた。

青年期になると百姓仕事の他はあまりうるさいことを言われなくなる。子供のうちに十分しつけてあるという意味で、着物でいうとシツケ糸が取れる時期ということになる。しかし青年になっての一番のしつけは村人とのつき合いであり、村の寄り合い、普請、屋根葺きなど共同の仕事は絶対欠かしてはいけないといわれた。家の中での親のしつけから、若者組、娘組など自治組織の中のきまりや規律によって自らを律していくようになる。

6. しつけを支えた意識の考察

古い風習や物の考え方がまだ色濃く残っていたと思われる会津地方のしつけを参照したが、筆者の生まれ育った新潟市でも同じようなしつけがされていたことを考え合わせると、日本全土の町や村で、似たりよったりのしつけがなされていたのではないかと考えられる。多分どこの地方のどこの家でも祖父母から親へ、さらにその子へと教え伝えられたであろう日本人のしつけ教育の根本にあったものは何であったのだろうか。次にしつけを支えた意識についての考察を行ってみたい。

1) 世間の目に対する意識 ―特定の他者による他律性―

過去のこうした家々でのしつけ方、しつけの内容を考えると、常に、“世間”の目、他人の目を気にして自らの、そして身内の者の行動を律していた日本人の姿勢が感じられる。

人に笑われるようなことをするな、人に後指をさされるようなことをするな、みっともないことをするな、そんなことをすると親が笑われる、親の肩身がせまい、人につまはじきされるようなことをするな、世間様に申しわけがたたない、世間に顔向けができない、などなど、親が口にしたであろう数多くの表現がある。こうしたごく普通の表現の中にも、世間という他者、村であれば村の衆といった他人の目をはばかり、他人に悪くいわれぬように身を低くして無難に世の中を生きていこうとする姿勢が感じられる。

古来農耕民族であった日本人の生活は“村の生活”を基本として考えることができよう。そしてその村々の単位はごく小さなものであり、生まれてから死ぬまで、ほとんどの人はそこで生きていかなければならなかったから、その小さな集団の中で無難に生きていくには、自分がどう思うかよりも、村の人がどう思うかという集団の物差し、価値観で我が身を律していく必要があったと思われる。

現在我々は大きな都市的集団の中に住んで“隣りは何をする人ぞ”の気楽さがあり、人の意に気兼ねなく自分の生きたいように生きられる自由のありがたさを知っている。規模の小さな社会ほど互いの規制が厳しく、人の目が互いを束縛し合う傾向があるので、他村との交流のあまりない、特定の人間集団の中での生きにくさは一方ならないものがあつたと思われる。

村という小さな集団社会の中で、家々の仕事には各戸毎の田畑の農作業のみならず、屋根葺き、田植、治水作業などの共同作業も多かった。各戸においても屋根の葺き替えなど他の村人の労働力を宛にしなければならない時もある。共同作業への協力を怠れば当然その家への援助は絶たれるということもあり得た。

人の生き死に、成長や祝い事にかかわる通過儀礼のやりとりに義理を欠いたり、まつりなどの村の行事などにもつき合いがわるかったりすると人にとやかく陰口をきかれる。また子供組、長ずれば若者組、娘組、^{おとな}大人間の種々の講組織など村にはさまざまな組織があつて、それらの中で不文律の村のきまりがあつた。村のきまりやおきてに背くものには村八分や村はじきといった厳しい仕置もされた。

このように閉鎖的な村の中での村づき合いや人間関係はかなり複雑で気骨のおれるものであつたと思われる。人にとやかくいわれずに平穩に生きていくために我が身をつつしみ、“目立つ”ことはせず、身を低くして生きる必要があつた。“出る杭は打たれる”というプレッシャーもまた強かつたと思われる。人に悪くいわれぬよう子供にも礼儀正しく挨拶ができるようにしつけ、年齢に応じた集団組織の中で相応のつき合いのできるよう小さな時から教えていったものであろう。

こうした日本人の姿勢から、特定の他者を意識しての“他律性”がしつけの底にある大きな要素の一つであると考えられる。

2) “お月さまが見ておられる”の意識 ―絶対的なものへのおそれ―

先項で考察したように日本人の生きる姿勢の中に“世間の目”を意識する他律性が多分に見られたが、“人の目”以外にも自分を律し、子供を律しようとするつつまじやかな姿勢がかつての日本人にはあつた。

よく引用される話に、「お月さまが見ているから」というものがある。会田雄次氏の『日本人の意識構造』から引用すると、月夜の晩に子どもを背負った男が西瓜畑を通りかかり、つい西瓜を盗もうとして「だれも見えてはいないだろうな」と独り言をいう。すると背中の子どもが「お月さまが見ているよ」といったので父親は翻然と悟るという話で、源は中国のお話のようである。

ドナルド・キーン氏と司馬遼太郎氏の対話『日本人と日本文化』の中で、両者はこの日本人のモラルの根底にある意識について興味深い意見の違いを見せている。ドナルド・キーンが日本人のモラルの基本を儒教的なものとするのに対し、司馬遼太郎は儒教や儒教的物の考え方は一部には学問として広がったが、日本人全体のものの考え方にはさして影響を与えなかったと述べている。司馬氏はむしろ非常に古い形の神道（明治以降の国家神道というようなものではない）的なものが日本人のモラルの根底にあったのではないかという。

お月さまが見ておられる意識と同様なものに、お天道様（おてんとうさま、またはおてんとさま）意識も日本にあった。島崎藤村の『夜明け前』の中にも、「金銭をみだりに我物と心得て私用に費そうものなら、いつか「天道」に^も泄れ聞える時が来ると誨えた」というくだりがある。月や太陽を敬い親しむ気持ちをこめて、お月さまが見ておられるとか、おてんとさまに恥かしいなどといったのであろうが、非常に漠然とした“神さま”的絶対者の存在を意識して考え方や行動を律したのではないかと筆者も考える。

老人がよくいうことに、「（こんな物体ないことをしたら）、^{こんにちさま}今日様に申しわけがたたない」というような表現があった。この今日様もお月さまやおてんとさま、神さまなどに通じる絶対者的なものを指していたのではなからうか。こうした何かははっきりとはわからないが、自分の行動や心の中をじっと見ていて、身にそぐわないことや、“^{ぶん}分を越えた”ことをすると“バチ”をあてられそうな漠とした存在を意識して、かつての日本人はつつまじやかに、ためらいつつ、我が身を律しながら生きた、と思われる。

子供のしつけにもよく神さまのバチがあたるなどと引き合いに出されるように、絶対者的存在への敬いの心やおそれ意識もまた、しつけを支える大きな意識であったと考えられる。

3) 恥の意識 一人に笑われまい意識—

先にあげた世間体や他人の目に対する意識と相通じるところがあるが、“人に笑われまい”意識を“恥”の意識としてとりあげてみたい。

いい年をして挨拶一つできない、ものを知らない、一人前の仕事もできない、まともな人づき合いもできない、など“恥かしい”ことは数々あり、そのようなことで当人やその家族が他人にばかにされたり、人前で恥をかかされることのないよう、しつけに励んだものと考えられる。

前述の露伴の娘文に対するしつけの厳しさも、嫁にいった先で恥をかくことのないようにという親の心づかいからと察しられる。ふすまの張り方にま

で玄人はだしの^{くろうと}技を^{わざ}伝授しようとした露伴が、文の配遇者となる人に、「どうもあなた、あれは女親がありませんので躰もなんにもめちゃくちゃで、まあどうやら飯ぐらい炊かせられますが、家事一切というにはまことに覚束ないことでして、一中略— 襖の貼りかたなんぞも教えといてやりやよかったです。」といっているくだりがある。（「父・こんなこと」より）人前に出して恥かしくない一人前の人間に育てたい、嫁にやっても家事万端はいうにおよばず、世間のつき合いも恥かしくないよう見事にやってのける人間に育てたいという、父親の手で育てたと同様の娘に対する自負と危惧の心情が伝わってくる。

村の寄り合いの場などで、満座の中で笑われ、恥をかかされるということが、互いによく知り合った仲間同志だけに辛いに辛い仕打ちであるか、人々はよく知っていた。「笑われるということは、村に住む者にとってもっとも大きな恥であった」と民俗学者の宮本常一氏も書かれている。人前で恥をかかぬようにという意識も、親のしつけの根底にある非常に強い意識であったと考えられる。

4) タテ社会の序列意識 —^{ぶん}分をわきまえる—

日本の社会構造が“場”を中心とした“タテ社会”という構造をもっていることを、中根千枝氏が『タテ社会の人間関係』で理論づけてから、タテ社会という表現が日本人の意識や行動を説明づけるのによく使われるようになった。

今日の日本企業の組織が見事なタテ構造の典型を示しており、ピラミッドの各層毎に役職名がピッタリと貼り付けられ、上下の関係と意識が厳として存在することは衆知の通りである。

近世の身分制度下にあっても、ムラに厳格な身分の差があり、村社会の構造は現代の会社組織などと非常に類似した性格をもっていた。当時ムラの運営にあたったのは、農地・家屋敷を所有し、直接年貢を役人に納める本百姓の身分の者であった。そして本百姓の中でももと郷土・小身武士・あるいはムラの代表であった名主・庄屋・^{きもいり}肝煎・村方三役（組頭・長百姓・百姓代・年寄）などは別格で、一般の本百姓である^{ひらかた}平方と区別されていた。本百姓以下の身分の者は地主から土地を借りている水呑み百姓、^{こまえ}小前などであり、日常生活万端にわたって差別されていた。

封建制度の確立した江戸時代では、厳重な身分制度の下、うっかり無礼な言動をすれば首が飛ぶという命がけの事態にまで及ぶこともあり得た。身分の低い者は「^{ぶん}分をわきまえた」身の処し方を体得する必要があった。頭を低

く、腰を低くして“事なく”生きていくのが、丸腰の庶民の身を守る知恵でもあったと思われる。無礼な振るまいや失礼な言葉で身を危うくすることのないよう、常に相手との上下関係を意識したものであろう。

そうしたタテ社会の人間関係を生きるための数々のきまりや不文律の約束事があった。英語での YOU というシンプルな二人称に比べ、日本語では相手によって微妙に呼称の変る外国人泣かせの二人称があり、尊語・卑語・同輩語といった複雑な敬語表現が存在する。また座敷や寄り合いでの上座・下座と座る人間の序列など、上下意識からできた約束事として現代にも残っているものが多い。

5) 集団の中の一員意識 —^{はず}外れものになるまい意識—

個人主義の強い外国人に比べ、日本人は集団性を強くもった国民であるといわれる。外国人は自分の仕事について聞かれると、会計係りとか秘書とか職種で答えるのに対し、日本人は〇〇会社に勤めているというように、自分の所属する“場”で答えるとよくいわれる。

たしかに、日本人は集団で物事をするのを好み、特定の集団に属していると安心する傾向がある。個性が強く、ムレから離れて一人我が道を行くタイプの人は一匹狼などと呼ばれたりする。何か事を決める場合、自分の考えはさておき、自己の属する集団の意向を気にし、コンセンサスを得ることを最優先させる傾向がある。集団の意思統一を第一義とし、時には周囲の考えに自己の考えを合わせていく。

このように、出すぎず、遅れず、離れず、に集団の中にバランスよく自分の存在の場を保つのが、現代でも日本人の一般的な生きる姿勢のようである。非常に自由に何もののにも束縛されずに生きているかにみえる現代の若者たちも、周囲の思わくを気にし、思ったよりずっと保守的な考え方をしているのに意外な思いをすることが多い。

古来日本人の社会生活は土地を基盤とした農耕生活での、ムレ(群れ)、ムラがり(群がり)という村集団から始まり、徐々に近世の町や市へと発展した。ムラの内部構成とその機能は複雑にしかもきっちりとできていて、村の協同生活を維持するための厳しい規制があった。村が自給自足で、確固とした自治組織のもとに地域社会が営まれていればいるほど、自律性が高く閉鎖的で、他所者(ヨソモノ)に対して反撥する傾向があった。親代々の村の生活者でないヨソモノが村境の外から入って村の成員になるためには、“ムラ入り”という厳重な手続きが必要であった。ムラ入りとは村祭りの集会や村寄りなど村で最も重要な集会に出て酒やさかなを馳走し、一定の文句・口

じょう
上で挨拶をし、有力者の紹介をうけるというのが一般的な方法であった。

村のウチ・ソトの観念はそれほど強いものであり、そこに定住するには、^{はず}“外れもの”にならないよう言動をつつしみ、村の一員として善良で模範的な生活をするのが最も大切なことであった。

村には用水管理・灌漑施設の管理、田植、収穫の互助、山林の共同管理などの他に、災厄の時の援助や見舞、婚礼葬儀の手伝い、家屋建築や屋根替えなど生活上の互助機能も整っていた。村の一員としての協力も厳しく求められるかわりに、困った時は援助してもらえ有りがたさもあったのである。村の集団性を乱す者にはそれなりの仕置きがあったことは前述のとおりだが、さらに村の中心にある神社や寺における^{うじこ}氏子組織や檀家組織の存在が“われわれの村”といったムラに対する受着心や忠誠心を高め、集団の意識を強める役をした。

日本人のこうした生活集団の性質を考えると、日本人の中に根強く存在する“集団の意識”というものが自ずと理解できるように思う。村の集団の中に身をおいて生きるより他に生きる道のなかった人々が、常に集団の一員という意識をもってその言動を律しざるをえなかったのは至極当然のことであったと思われる。

7. おわりに

古くよりほぼ日本全土的に行われていたであろう“しつけ”のあり方、その一部を会津地方のしつけの記録をかりて示した。さらに村という集団組織の中での日本人の生活意識をさぐり、しつけを支えた意識についての考察を行ってきた。このへんでそろそろ冒頭の“電車の中の居眠り”に話を戻さなければならない。

1) 日本人の内向き意識 一身内意識

前の章で、(1)世間の目に対する意識 (2)お月さまが見ておられる意識 (3)恥の意識 (4)タテ社会の序列意識 (5)集団の中の一員意識の5項目をしつけの基本的意識として考察を行った。その結論として、過去の日本人のしつけは「内向き」の意識によって支えられたものであって、「外向き」にはできていなかったと考えることができる。

自分の生まれた土地で生涯を生きるのが、ほぼ一般的な日本人の生き方であった。その生きる場は固定的で閉鎖的な村集団であり、集団の中でのほぼ共通の生き方のパターンを身につける必要があった。

よく“広い世間”というものの、その実態はごく小さな、お互いによく知

っている人間の集団であって、小さいだけに“世間の目”はすみずみにまでいきわたり、生活の細部に至るまで互いに見透しになる傾向があった。“世間の目”を気にせずには何一つ物事がすすまないというような窮屈さがあったであろう。人に後指さされたり笑いものにされず、しかも、目立った存在にならぬよう、子供を一人前にしつけることが親の大切な役割でもあったと思われる。

自己の属する集団の中に安住するために、そこからはみ出ぬよう、^{はず}外れものにされぬよう気をつかわなければならぬことを親は身をもって子に教えたであろう。村のきまりや義務を守り、通過儀礼などつき合いの義理を欠かさず、村の共同作業はまじめに勤めよと、親は村の一員としての子の教育を行った。

村のウチとソトの区別が厳重に守られた、村という人間集団の中での上下関係・横の関係、この限られた人間関係だけが村の住人にとって大切なものであって、そこでの失敗のないようさまざまな心づかいがなされていた。反面、村の外の人間、つまり集団における特定の構成員以外の第三者にはまったく考慮がなされないばかりか、はっきりヨソモノとして敵対視したのである。

日本人の行動意識を、過去におけるしつけの面から追求してみた結果、日本人の意識構造が「身内的」存在にのみ向けられた「内向き」なものとして作られてきたものとの結論に達したのである。

2) 現代日本人の行動意識について

1)の考察を基に現代日本人の行動や傾向を考えると、“電車の中の居眠り”も納得できるような気がする。この拙稿は、“電車の中の居眠り”という比喩的な表現を使ってもつと一般的な日本人のパブリック・マナーの欠如に対する考察を意図したものである。次に、本稿の最終的課題であるこの問題を「内向き」の意識によって分析してみよう。

自分の属する集団の中での上下関係を重んじ礼をつくす、しかもその範囲内では極端に礼をつくす、という傾向が今も日本人の特性としてみられる。身内意識が強く、親子、一族は勿論、会社集団等でもその意識は強く結束は固い。ときには社長と社員を親子に例えたりする。その反面、知らない他人には冷たく、一顧だにしないことが多い。日本人は自分と直接関係のない人や物事に関心をもったり、興味を示す度合いが薄いように思われる。たとえば公共の施設に対する配慮のなさ、ボランティア活動などに対する関心の薄さなどをその性向を示す例としてあげることができよう。

自分の知らない人にはひどくそっけないが、一度知己を得て身内的意識が生じると、今度は昔からの知り合いのように強い親愛の情を示し、気を許す傾向もみられる。相手がどういう人間でどういう考え方をもつ人かを確かめずには不用意に心を開かないという、保守的な姿勢が根強く受け継がれているのであろうか。とくに人なつこくオープンなアメリカ人が、知らない人にも気軽に声をかけてスマイルを見せるのと対比的に、日本人は表情も固くコミュニケーション下手である。日本では知らない人に声をかけ合うという習慣がなく、訓練も受けてこなかったのであるから無理もないが、長年の内向き意識によってつちかわれてきた日本人の体質そのものでもあろう。

本来心やさしいしつけを受け、お月様をはばかり世間をはばかり(“はばかり”という言葉も最近では聞かれなくなったが、恐縮する、遠慮する、おそれつつしむなどの意) 下向き・内向きの姿勢で生きた日本人の体質が、外向きの社交性に欠け、シャイでうちとけにくく、人前であまり自分を主張しない消極的なタイプの人間を作ったのかとも思われる。

都会の通勤電車の中の、自分の知らない不特定多数の人々の前ではさほど自分の格好を気にかけずに居眠りができるとか、知る人ぞない外国で恥かしい行動をしてひんしゆくをかうことなども、「内」以外には関心が薄く、外向き意識の欠如しがちな日本人の性向の故かと考えられる。

さいごに、冒頭で引用した“風”氏の「フランス人などは大衆のなかに潜む他者の目を意識して常に武装する。だから彼らの日常は緊張が高い」という個所を再びとりあげてみたい。筆者はよく学生に“自分を見つめる第三の目”(自分の二つの目の他に自分の心や姿を見つめるもう一つの目の意味で)をもち、常に冷静に自らの行動を反省することを教えてきた。風氏の説く“大衆の中の他人の目”という言葉に強く魅かれたのも、他者の目と自分の目の相違こそあれ、自分の言動を第三者的に見つめるという意味でこの“第三の目”と相通じるところがあったからである。

この“大衆の中の他人の目”に対する意識は現在日本社会でもわずかではあるが徐々に育っているように感じられる。一般的にはパブリック・マナーも向上しているようにみえる。公共施設の使い方でも最も目につきやすいトイレを例にとってみよう。

少し前まで汚なさにおいても最悪であり、用が足りれば式実用一点ばりで使用感など一切おかまいなし、利用者の方も配慮一切なしの感があった JR のトイレが、最近少しばかり使いよくなった。JR で多少おしゃれをほどこ

したせいか、利用者もやや気を遣っているようである。デパートのトイレなどでも、欧米式に入口で並んで順番を待つやり方を意識して行っている人が見られるようになった。その方が合理的でイライラせずにすむことがわかっていても、誰かが率先して実行しないとなかなか定着しないものだから、これは好ましい傾向である。指示されなくとも、よいと思うやり方は勇気をもって実行しようとする姿勢が、パブリック・マナーの向上にとって大切なことなのである。

過去の日本人が汲^{きゆうきゆう}々として気にしていた“世間の目”的狭い範囲に対する内向き意識そのものは、現代の日本人においてはかなり薄れてきていると思われる。しかし“大衆の目”的、他者への意識がまだきちんと育っていないために、パブリック・マナーの欠如などが指摘されるのであろう。大衆のなかに潜む他者の目に対する意識はすなわち自己規制の意識でもある。この意識を育て、互いに住みやすい社会に成長させることを念じて拙稿を了えたいと思う。

参 考 文 献

- 幸田文著『父・こんなこと』新潮社 平成元年
大藤ゆき著『子どもの民俗学』草土文化 1982 年
根本謙之助著『しつけの贈り物』桜楓社 1984 年
柳田国男著『定本柳田国男集第二十九卷』筑摩書房 昭和 39 年
会津の民俗研究会編『会津の民俗第 15 号 1985, 3』歴史春秋社 昭和 60 年
会田雄次著『日本人の意識構造』講談社 1988 年
対談ドナルド・キーン・司馬遼太郎『日本人と日本文化』中央公論社 1990 年
島崎藤村著『夜明け前』第一部（上）新潮社 昭和 56 年
宮本常一著『宮本常一著作集 6 卷』未来社 昭和 42 年
中根千枝著『タテ社会の人間関係』講談社 昭和 42 年
大島建彦他編『日本がわかる事典』社会思想社 1989 年